

# ハーバート・リードの詩 *A World Within A War* について

岡 田 仁

## 1

*A World within a War* は1944年出版のハーバート・リード (Herbert Read) の小詩集である。1966年版の *Collected Poems* によってこれをみると、比較的長い詩2篇(いづれも200行程度)と短詩9篇とから成っている。これらの詩は初版の年代と詩集のタイトルから察せられるように、第二次世界大戦中に書かれたものであるが、意外にも、戦争に対する直接の言及は極めて少ない。第一次世界大戦においては、歩兵将校として戦闘に加わり、その体験をもとにした秀れた戦争詩を発表していたこの詩人にとっても、第二次世界大戦は「実感のない戦争 (unreal war)」だったのである。

しかし、リード自身が多少自嘲を込めて言ったこの“unreal war”という言葉は、短絡的に、戦争に対する無関心と結び付けてはならないだろう。事実、リードほど戦争の問題を一貫して考えてきた現代詩人は他にいなかったと言っても過言ではない。我々はむしろ、この“unreal war”という言葉によって、戦争という捉えようもない無気味な影と対峙している一人の詩人の姿を思い描くべきであろう。第一次世界大戦当時のリードの戦争詩は、いわば、この黒い影の真っ只中であって、その部分部分に、丁度小さなスポットライトを当てていったような詩であったが、*A World within a War* の場合は、遙かかなたから投げかけられてくるこの影によって、詩人の心の中に作り出される様々な模様が詩の対象になっているのである。

二つの大戦の間の20年間、リードが努めてきたのはロマン主義の伝統の継承とその20世紀における新たな展開であった。また彼の政治的信条はアナキズムである。そのどれもが人間の可能性に対する信頼を基礎にして初めて成立する思想である。しかし、二度目の大戦の勃発はこの思想を根底から揺り動かした。たしかに、イギリスの文芸思想全体からみれば、最初の大戦前後から既にヒューマニズム思想一般に対する懐疑が芽生えていたのであるが、リードの場合はむしろ逆に、最初の大戦の戦闘体験を通して、人間性に対する信頼を確固なものにしていった感がある。皮肉なことだが、彼はアナキズムの基になる人間相互の信頼と協力の可能性を、自分の指揮した小さな戦闘集団の体験の中で実感したのだった。このような戦闘集団における信頼と協力というものは、それだけが生存の唯一の

条件である極限状況から生れるものであって、現実の一般社会全体への普遍化には無理があるはずだが、リードは、むしろ現代社会全体が戦場と同じような危機的状況に置かれていることこそ我々が認識すべきであって、その状況を突き破る唯一の手段が、人間相互の信頼と協力であると信じていたのである。彼のロマン主義とアナキズム論は、表面的には楽天主義の色彩が濃くとはいえず、その背後にある現実認識はかなり深刻なものだったと言えるだろう。

このような危機意識自体は今世紀の文学者に共通なものだが、その克服に向かっては、宗教的方向を取る人々が、いわば正統的な位置を占めていたように思われる。ところが、リードの場合は逆に、そのような「正統的」な文学者が現代社会の混沌の元凶の一つに数えていたロマン主義的ヒューマニズムの方を、自己の思想の根底に据えたのである。彼も文学活動を始めた初期の頃は、今世紀の英国の文芸思想を形成していったヒュム (T. E. Hulme) やエリオット (T. S. Eliot) に最も近いところにいたのだが、その後は結局、彼独自の、こう言ってよければ、「異端」の道を歩むことになっていった。

その理由は、ここでは、彼の気質にあったと言いに留めておくが、例えば彼の初期の戦争詩“Liedholz”における自己の体験の昇華の仕方などにも、それが表れているように思われる。この詩では、捕虜にしたドイツ人将校と、片言のフランス語でベートーベンやニーチェを語り合い、二人の間に理解が生じることが暗示され、そのような心の交流がテーマになっているのだが、同じ体験を扱った散文作品“The Raid”では、大部ニュアンスが異なり、捕虜となった者とそれを捕えた者との間の冷い緊張関係の方に重点が置かれている。つまり、リードには冷徹に現実を見つめる眼と、その現実を何らかの形で理想へと変革させようとする意識が併在し、ともすれば後者の意識がこの詩人を空想に向かってあまりにも高く飛翔させる傾向があったと言えるだろう。リードの行動や思想は多くの矛盾に満ちているのだが、その原因の一部はこのあたりにもあるように思われる。

しかし、ともかくも、リードは二つの大戦の間の20年間、自分の信じる理想を掲げ続けてきたのである。たとえその理想の実現が一つのフィクションにすぎないにせよ、そのフィクションを信じ続けることこそ詩人の任務であると彼は考えていた。二つの大戦の間のヨーロッパの状況を考えれば、このようなフィクションを維持していくことは、決して単なる「甘いロマンチスト」に出来ることではなく、むしろ、強靱な精神が必要だったことは明らかであろう。

だが、そのような努力を全て否定する形で、二度目の大戦が始まったのである。上にみてきたリードの思想的経緯を考えると、この大戦がリードに与えた衝撃は計り知れないものがあったと思われる。この小論は、その二度目の大戦の中で、絶望と希望の間を微妙に揺れ動くリードの内面世界を、*A World within a War* の中の“Ode”と、詩集と同名

の “A World within a War” の2篇を中心にして、探ってみようとするものである。

## 2

詩集 *A World within a War* は自然が全体の基調を成しており、動乱の世界から閉ざされたこの自然の中で、人間について考察をするという設定になっている。

いま、詩人は16年前に建てた、1エーカーの敷地をもつ草ぶき屋根の家に住み、周囲の自然に溶け込むようにして暮している。そこは外部の世界の侵入を拒絶して、詩人とその家族を守るべき一つの城となっている（以上 “A World within a War”）。間近まで押し寄せてくる戦争も、そこでは遠い世界の出来事にすぎない。

Unreal war! No single friend  
links me with its immediacy.  
It is a voice out of a cabinet  
a printed sheet, and these faint reverberations  
selected in the silence  
by my attentive ear.

Presently I shall sleep  
and sink into deeper oblivion. (“Ode”, ll. 98-105)<sup>1)</sup>

これは完全な逃避であるが、しかし、詩人はそのような逃避の姿勢に傾いていく自己を確実にみつめることによって、人間性の一面を確認していたのである。前の大戦が終った時、誰もがその悲惨な教訓を生かそうと誓ったはずであり、詩人も「戦争とそこに巻き込まれた人間の真実を語る決意」をもって、大戦後の世界へ復帰していったのである。しかし、

It is right to forget  
sights the mind cannot accommodate  
terror that cannot be described  
experience that cannot be exorcised in thought.

It is natural for others to resent  
the parade of wounds  
eyes haunted with unrevealed sorrows  
the unholy pride of sacrifice. (“Ode”, ll. 61-68)<sup>2)</sup>

ここにあるのは、人間性の一面に対する深い悲しみと諦観であろう。そしてそこには同時

- 1) 以下、引用した詩に大意をつけておく。(実感のない戦争！ この戦争に直接係わる友人は一人もない。戦争はラジオと新聞と、静寂の中で耳を澄ませば聞えてくる微かな砲声の轟きだけだ。やがて眼りにつけば、私はさらに忘却の彼方へと沈んでいくだろう。)
- 2) (精神が応じきれない光景を、言いようのない恐怖を、思想で浄化できない経験を、忘れるのは当然だ。これ見よがしの傷口や、秘かな悲しみにとりつかれた目や、犠牲だなどという汚れた誇りなど、他人がいやがるのも無理はない。)

に、自分自身に対するある種の苦々しい思いも込められていたはずである。その思いが、結局、詩人にいつまでも逃避していることを許さないのである。いかに外界から遮断されていようとも、この静かな家のかなたを通り過ぎて行く列車の振動は、詩人のカップとスプーンを微かに鳴らす (“A World within a War”)。まして、海峡を伝わって響いてくる砲声は、詩人の attentive ear を捉え、さらに想像力によって増幅されて、詩人の心に大きくこだましたはずである。その瞬間、詩人を襲うのは深い絶望であったろう。一人の戦争経験者として戦争の悲惨さを訴え、一人の詩人として、理想世界の姿を思い描いてきたリードは、そのような世界を築く大前提ともいうべき、人間性に対する信頼を、再び自分を襲う戦争の中で失い始めていたのである。

Happy are those who can relieve  
suffering with prayer  
Happy those who can rely on God  
to see them through.

They can wait patiently for the end.

But we who have put our faith  
in the goodness of man  
and now see man's image debas'd  
lower than the wolf or the hog—

Where can we turn for consolation? (“Ode”, ll. 166–175)<sup>3)</sup>

この問が *A World within a War* を貫くテーマである。普通、この問はリードにとって、神を取るか、人間を取るかという形で迫ってくるものであった。この二者択一が同じ範疇で成立し得るものかどうかは問題にしる、少なくとも、独自のヒューマニズム思想を確立しようとしていたリードにとっては、たえず問い直していかなければならない問題だったのである。やはり戦時中に書いた評論の中で、彼はこの問を次のような形で述べている。「問題は、超自然的教義の解釈を取るか、それとも、人生を自然現象とみる解釈を取るか、つまり、信仰と理性のいつれを取るかということである。」<sup>4)</sup> リードは人間の理性を選択し、その可能性に大きな希望をいだいてきたのだが、またもや繰り返される人間の愚行をまのあたりにして、人間の善に対しても根本的な疑念をもち始めていたのだった。結局、この時のリードは、自身に課していたこの二者択一の問そのものが否定され、神も人間も信じることの出来ない深い絶望の淵に沈んでいたことになる。上に引用した詩にある問はそこ

3) (祈って救われる人々、神が見守ってくれると信じられる人々は幸せである。彼らは終末をじっと待つことができる。だが、人間の善を信じてきて、今やその姿が狼や豚にも劣るのを見る我々は、何に慰めを求めれば良いのだろうか。)

4) Herbert Read, *To Hell with Culture* (1941; rpt. Schocken Books, 1964), p. 174.

から発せられたものであった。

しかし、リードは常に虚無とは無縁であった。陥った絶望の深さによって思想の深さが測られるとするならば、それはリードにとっては不利な尺度であろう。彼は絶望に対しては寡黙であり、希望の高さだけを語る詩人であった。したがって、深い絶望の中で書かれた *A World within a War* も、最終的には、希望の歌である。そして、その希望を支えたのが、彼の最後の拠点とも言うべき自然だったのである。詩論から政治論に至るまで、リードの思想の根幹を流れるものは、生成する自然をモデルにした有機的形式論であるが、今またその自然が、ごく intimate な姿をとって詩人の心に語りかけてくるのである。この時の自然は思弁の対象としての自然ではなく、確固として存在する tangible な自然であった。それはリードの原体験とも言うべき幼年時代の農園生活をうたった彼の初期の詩集 *Eclogues* (1919) の自然と本質的に同じものである。暗い戦時下にあつて、リードが最後の拠所として全身全霊を傾けて体得しようとしていたこの自然が、究極的には、彼自身が言うように唯物論的自然観の範疇にとどまるものであったか、あるいは、汎神論的自然観に向かうものであったかは微妙な問題であるが、この点にも関心を払いながら、*A World within a War* の考察を続けたい。

### 3

“Ode”には、「1940年5月、ダンケルクの戦いの中に記す」という但し書きがついている。ダンケルクの戦いというのは、周知のとおり、第二次世界大戦の緒戦で、ドイツ軍の猛攻を受けて壊滅状態に陥った30万余りのイギリス軍が、フランスから必死に英本国へと逃れていった撤退作戦であるが、海峡一つを隔てて迫ってきたドイツ軍に対する当時のイギリス人の恐怖は想像を絶するものがあつたと思われる。

しかし、この詩は静かに始まる。

Fair now this world of peace  
 this May sun rising over the quicken'd birds  
 giving the tender leaves  
 a human warmth: opening  
 with golden fingers the heart of the rose. (ll. 1-5)<sup>5)</sup>

この詩の書かれている状況を考えると、冒頭のこの部分は一見アイロニー風だが、実は決してそうではない。詩人は死と混沌の世界にバラの花を開かせる5月は残酷な月だなどと言っているのではなく、これは正真正銘の自然賛美である。いま、詩人が目にして

5) (この平和な世界の美しさ。5月の太陽は目覚めた鳥の上に昇り、柔らかい葉に人肌の温もりを与え、輝く指先でバラの心しんを押し開く。)

は生を謳歌しているこのような自然の美しさであることを、我々は覚えておく必要がある。何故なら、この自然のイメージが、この詩の最後の部分に突如として表明される絶望から希望への、一見何の脈絡もない飛躍を生み出すバネになっているからである。

だが同時に、生の象徴としての自然は、必然的に、死を内包する。

On the sunned earth  
 an Iceland poppy has shed its petals  
 they shrivel in the heat  
 soon to disintegrate  
 cell by cell  
 in the slow material  
 kiss of death. (ll. 12-18)<sup>6)</sup>

しかし、リードはこのような死を恐れているのではなく、むしろ願っているのである。人の存在を自然の営みの一環の中で捉えようとするなら、一枚の花びらと同じ運命を受け入れねばならぬし、それが一番望ましいことになる。完璧な自然の営為の中にあれば、生と死は一つの環をなすように完結し、そこには人間を思い悩ませるような謎や神秘の入り込む余地はなくなるはずである。人もまた、絶望も知らず神をも必要とせず、束の間であれ咲き誇り、静かに散っていく一枚の花びらのような存在であれたならばという願いは、恐らく、リード一生のものであったろう。彼がしばしば用いる *innocent* という言葉も、必然的に自己分裂へと至る自意識をもつ以前の、幼年時代の自然との一体感に根ざしていたのである。しかし、このような願いそのものが、自然との無垢無意識の一体感を否定された時初めて生まれてくるのは、人間に付きまとう皮肉の一つであろう。

この時のリードは、戦争を社会的、政治的悪としてよりは、むしろ、このような生と死の完結を妨害する最も「不自然」な現象として捉えていたのである。その限りにおいて、この詩の世界は個人の内面世界を一步も出るものではなく、そこに浮んでくる詩人の姿は、社会的視点から見れば、嵐の過ぎ去るのをじっと待っている逃避的姿勢以外の何ものでもない。これも確かに戦時中のリードの生活の一端である。しかし、この同じ詩人は同じ時期に、評論の分野では、積極的に社会的発言を行っていたのであり、さらに、戦時下出版統制法によって罪に問われたアナキストのための弁護活動に奔走することになるのである。少し大袈裟な言い方をすれば、第一次世界大戦で銃を手に戦ったリードは、第二次世界大戦ではペンを手に戦っていたのであり、その時の相手は、「民主主義を守るために」戦っている国における民主主義の崩壊という手に負えない難敵だったのである。表現の自由の問題にしても、リードはそれをあらゆる文化の基礎であるばかりでなく、個人にとっ

6) (日の照る大地に花びらが散り、しおれて、一つ一つ細胞が分解していく、生命をゆつくりと物体へと化していく死に触れて。)

でも、創造と結び付いた生の充実の基本的条件であると考えていた。つまり、創造し表現するということは、木が枝に花を咲かせるのと同じ意味で、人間にとって欠くことの出来ない「自然」な営為であるとみなしていたのである。しかし、人間の作った社会が人間にそれを許さず、特に戦争はそのような社会の本質を余す所なく露呈させる。このような思いを胸に、この時のリードは、好むと好まざるとに拘らず自己の生存の場である国家という共同体の危機を背後において、外界の嵐を避けるように自己の内面世界へと沈潜しながら、5月の輝く自然の中に佇んでいたのである。その時、人間＝花びらというイメージは次のように捉えられることになる。

The petals  
no longer lie withering where they fall  
but are torn and crush'd, and into the soil  
mashed rawly. (ll. 37-40)<sup>7)</sup>

この花びらのイメージが暗示するのは、無目的にしか見えない歴史の流れの中に投げ込まれ、生と死の完結も許されぬ人間の運命であるが、これはリードの詩では重要なテーマの一つになっていた。青年時代の戦争体験によって、リードは歴史と個人の問題を否応なしに突き付けられていたのである。無意味に殺されていく者にとって、自分の死の意味をどこに求めるかは切実な問題であり、例えば、1933年出版の *The End of a War* においては、それぞれ自分の生と死を見つめる、無神論者のドイツ人将校、カトリックと思われるフランス人少女、そして不可知論者のイギリス人将校の独白が神を軸にしながら展開される。この詩はリード自身が不可知論に至る思考の流れを暗示するものであるが、その中でイギリス人将校は人間の歴史について次のように語る。

Now I see, either the world is mechanic force  
and this the last tragic act, portending  
endless hate and blind reversion  
back to the tents and healthy lusts  
of animal men: or we act  
God's purpose in an obscure way. (The End of a War, III. ll. 147-152)<sup>8)</sup>

そして彼は結局、確固として信じることは出来なかったにせよ、神の存在を仮定することによって、ほのかな希望を感じながら、戦後の世界へ踏み出していくのである。

7) (今や花びらは落ちた所に朽ちていくのではなく、千切られ、砕かれ、ひりひりと地面にこすりつけられる。)

8) (世界は機械にすぎず、この戦争はその最後の悲劇的動きであり、果てしない憎悪と、再び人間が動物的肉欲と未開の生活へと盲目的に退歩していく予兆である。それとも、我々はそれと知らずに、神の目的を果たしているのであろうか。)

God is love:  
 in his will the meek heart rejoices  
 doubting till the final grace a dove  
 from Heaven descends and wakes the mind  
 in light above the light of human kind  
 in light celestial  
 infinite and still  
 eternal  
 bright (ll. 162-170)<sup>9)</sup>

第一次世界大戦後の混乱したヨーロッパ文明の中で、その再生を希求することを課題の一つとしていたこの時期の文芸思想は、様々な模索の中で、宗教的方向を取る傾向も強かったのだが、この詩に見られる神への傾斜もこうした傾向と無関係ではないだろう。しかし、リードは宗教の中に、人間を卑小な存在として限定することによって、秩序や安定を求めようとする一種の権威主義的な匂いを嗅ぎ取っていたのであって、それは彼のロマン主義的な人間観とは相容れないものであった。つまり、リードは制度としての神を否定したところで、神の証を求めていたと言えるだろう。したがって、彼の基本的姿勢は、上に引用した詩に則して言えば、*the light of human kind*、すなわち、人間の理性を信じ、それがどこかで *light celestial* と結び付き、一つに溶け合って輝くことを願い続けるものだったと言える。しかし、二度目の大戦によって、リードが人間の理性に対して深い疑念をもつに至ったのは、すでに前章でみたとうりである。リードにとって、神の光、*light celestial* があるとすれば、それは *the light of human kind* をとうして人間に呈示されるはずのものであったから、この人間の理性の否定は、彼にとって二重の意味で絶望を意味したわけである。こうした背景の下で、この暗い絶望を明るい希望へと転化させるべき光を、リードは自然の中に求めようとしていたのである。

さて、“Ode”において、リードは砕け散り朽ちていく花びらの中に、盲目的に流れすぎた歴史の中で生にも死にも意味を与えられることのない個人の運命を見たのであるが、しかし、このイメージそのものが、そこに生命現象を内包しているために、いわば、イメージの展開の論理的帰結として、次の瞬間このイメージは一転して肯定的意味をもつことになる。すなわち、人間の歴史ではなく、たえず生成発展を続ける自然の営み全体の中で個を捉え直せば、すべての生と死に意味が与えられるのではないかという仮定である。これは結局、リードが好んだ「生命の樹」と同一のイメージであるが、人類という大樹に生い茂る一枚の葉としての個人は、この詩では一貫して花びらのイメージで語られていく。

9) (神は愛であり、その神意にこの弱い心も喜びを感じる。だが、最後の恩寵が一羽の鳩となって天から舞い降り、この心を目覚めさせてくれるまでは、人間の光の上に、天上の無限の光が輝くまでは疑い続けるが。)

[The self]  
 grows like a bud  
 petal by petal  
 exfoliated from an infinite centre  
 the outer layers bursting and withering  
 the inner pressure increasing  
 seeking the light  
 and the flush of colour born of light. ("Ode", ll. 204-210)<sup>10)</sup>

これを一般的な死生観として取ると、生と死をこのように考えることによって救いが得られるかどうかは疑問であるが、我々はむしろこの詩の書かれた時点におけるリードの絶望の深さと、背後にある社会的、「人類的」危機を念頭において、このイメージのもつ意味を考えるべきであろう。さらに、この「生命の樹」のイメージを成立させるために、リードはこの詩では一貫して人間を即物的に捉え続けている。つまり、この詩で表わされている人間像は基本的には花びらと同一次元にある一個の生物であり、それ以上ではない。

Our person our world  
 flex'd limbs, elastic muscles  
 flow and flood, ripple of breath and blood  
 against the skeleton's brittle wall  
 eye's eagerness, lickerous tongue  
 ear's selection, finger's fine division  
 all senses single and combin'd  
 construing the living scene  
 extending and contracting  
 finding  
 the livid elements the languorous the sublime. (ll. 130-140)<sup>11)</sup>

ここでは、人間だけに固有と思われる外界に対する解釈も生物的感觉だけによってなされているのであり、この感覚は、木に花が咲くのと同じ意味で、あるいは、昆虫に足が6本あるのと同じ意味で、人間に付加された属性の一つにすぎないことを、この一節のコンテクストは暗示している。こうして、リードはこの詩ではあえて *physical* な場に留まることによって、一貫して流れつづける自然の生成の中に人間のイメージを定着させることが出来たと言えるだろう。この条件が成立して初めて、この詩の世界は完結することになる。すなわち、暗い戦時下にあって *livid* な要素を見つづけていた詩人の感覚が、いまこの瞬間目にしているのは、この詩の冒頭の一節にあるような、5月の太陽の下に輝く自然の美

- 10) (個はつばみのように一つ一つ花ひらき、無限の中心から剝離していく。外層が開花と衰えを繰り返しながら、内部の力は増していき、光と、光から生まれる色鮮やかな輝きを求める。)
- 11) (我々の個体が我々の世界である。しなやかな手足、伸び縮みする筋肉、呼吸と血液の流れ、それを受けとめる折れやすい骨、じっと見る目、舌なめずりする口、聞き分ける耳、繊細な指先。これらの感覚が、伸縮を続ける生きた世界を解釈し、どう黒いもの、倦怠を誘うもの、崇高なものを見つけていく。)

と力である。それは圧倒的な力で詩人に迫り、詩人の感覚はそれを *sublime* と捉える。そして、この *sublime* な自然につながるものとして人間に対しても、その未来に希望を託しながら肯定することが可能となるのである。したがってこの詩は、それがたとえ詩人の感覚の一瞬の錯覚であろうとも、次のような美しいイメージで終ることになる。

Shield the shoot  
interpose a misty veil  
water the root  
this flower shall exhale  
its scented peace  
bringing to the war-weary world  
the perennial release  
from fear.

The self perfected  
tranquil as a dove  
the heart elected  
to mutual aid.

Reason and love  
incurv'd like a prow  
a blade dividing  
time's contrary flow.

Poetry a pennon  
rippling above  
in the fabulous wind. (ll. 216-234)<sup>12)</sup>

## 4

次に検討する“*A World within a War*”は、多くの点で“*Ode*”とは対象的である。この詩でも自然の描写が大きな位置を占めているが、それは5月の陽光の下で光り輝く自然ではなく、死を暗示する冬枯れの風景である。

It was the first year of my second war  
When every night a madden'd yaffle  
Thrummed on the icicled thatch.  
Another day a reckless kestrel  
Dashed against a gable and fell  
Dead at my feet: the children

12) (この芽を守り、霧でおおい、根には水をやろう。いつかこの花が平和の香りを漂わせ、戦いに疲れた世界を恐怖から永遠に解放してくれるだろう。完成した個は鳩のように穏やかで、その心は互いに助け合うために選ばれたのだ。理性と愛で舟の舳先を作り、逆流する時代の流れを突切って行こう。その時、詩は騎士の旗となって、大風の中を頭上に波うつ。)

Watched its dying flutter and the fiery eye  
Slowly eclips'd under a dim grey lid. (ll. 29-36)<sup>13)</sup>

この自然の中で、詩人の心はより内省的な方向へ向かい、自身の姿を修道僧のイメージと重ね合わせながら、自然と人間の省察を続ける。

まず、人間について、自分用に書き改めた「聖務日課書 (a Book of Hours)」の中で、次のように語る。

Talk mainly of the Human Passion  
That made us in a conscious fashion

Strive to control our human fate:  
But in the margins interpolate

Apes and angels playing tunes  
On harpsichords or saxophones

Throughout the story thus maintain  
Under a sacred melody the bass profane. (ll. 73-80)<sup>14)</sup>

これはリードの基本的な人間観を示したものである。猿が吹き鳴らすブーブーという汚れた低音は、もしかしたら、天上の音楽と何処かでハーモニーを成しているのかも知れず、もしそうだとすれば、猿＝人間は、いかに汚れていようともこの音を懸命に吹き鳴らすしかなないのである。したがって、例えば詩人の思い描く聖者のイメージは、ある日突然、自分の信念のために立ち上がり死を選ぶが、日頃は酒と女に現を抜かしているような男たちである。このような行為こそ、キリストならぬ生身の人間の *Passion* であることを、また、このような行為へと駆立てる *passion* があらゆる人間の内に可能性として残されていることを、上に引用した一節は暗示している。こうして戦争がもたらす死の予感の中で、詩人の心は次第に「殉教」のイメージをふくらませていくのである。しかし、いかなる場合でも、何かに殉じるということは、その死を正当化する、個人の生を超越したより大きなものの存在を信じなければ成立しない。例えば、国家であり、神であるが、リードにとって、前者は実在はしていても否定すべき存在であり、後者はその存在を信じきれない一つの仮定にすぎなかった。したがって、既に前章でみてきたように、リードにとって人間個人の

- 13) (二度目の大戦の一年目だった。毎夜キツツキがつららの下がった草ぶき屋根を気違いのように突ついた。先日は無鉄砲なトンビが破風に当って私の足下に落ちて死んだ。子供たちは、この鳥が羽根をばたつかせながら死んでいくのを、火のようなその目が灰色のまぶたの下で、ゆっくり翳っていくのを見ていた。)
- 14) (人間の運命を人間の手で支配しようとする人間の情熱を語ろう。だが余白には、猿と天使がハーブシコードやサクソフォンで音楽を奏でている姿を書き加え、聖なる調べの下に、俗界の低音をいつまでも鳴らし続けておこう。)

生を超越したより大きな存在として残されていたものは、生成を繰り返す自然の本質だけだったのである。このような自然観と、死を賭けるに値する信念を持たぬ者は奴隷だという彼の倫理感が結び付いたところで、この詩にみられる殉教のイメージが生れてきたと言えるだろう。だがこのイメージは、“Ode”において花びらのイメージが必然的に自然の生命力の肯定に向かっていったのと同じ意味で、詩人を死の受容へと導いていくのである。そしてその時、詩人の心は大きく神に向かって傾斜していたのであるが、その神は、抽象概念としてではなく、自然の省察を通して詩人に予感される何ものかであった。したがって、“A World within a War”における自然描写は、“Ode”の場合と異なり、自然の背後にある何ものかを暗示する形でなされている。

The best of life is sparely spent  
 In contemplation of those laws  
 Illustrious in leaves, in tiny webs  
 Spun by the ground-spider: in snailshells  
 And mushroom gills: in acorns and gourds —  
 The design everywhere evident  
 The purpose still obscure (ll. 106–112)<sup>15)</sup>

そして詩人はさらにこの自然の中に踏み込んでいきながら、はっきりと汎神論的態度を表明するのである。

I walk through the woods with God (l. 114)<sup>16)</sup>

これは“Ode”における自然観と著しい対象をなしているが、矛盾を意味するものではない。“Ode”においてリードは出来るだけ即物的に自然を捉えることによって、自然の生命力と人間とを結び付けることが出来たわけであるが、“A World within a War”においても、リードの基本的態度は自然を即物的に捉えることであり、神秘主義に陥っていたわけではないのである。tangible な自然を見れば見るほど、そこには、ある一定のパターン——上の引用に則して言えば、デザイン——が浮び上がってくるのであり、リードの究極の目標は、このパターンの意味と人間とを結ぶ手掛りをつかむことであった。言い換えれば、“Ode”において一枚の花びらの延長線上に人間を置いたように、この詩では、ドングリや瓢箪に見られるパターンの延長線上で人間のパターンを捉えようとしているのである。

15) (これらの自然の法則を熟視することを人はあまりしない。葉、小さな蜘蛛の巣、かたつむりの殻、きのこのひだ、どんぐり、ひょうたんなどに、はっきりと表われているこれらの法則は、至る所に顕在しているのだが、その意図はいまだに謎である。)

16) (私は神と共に森を歩く。)

Mind looks into a mirror pois'd  
 Above body: sees in perspective  
 Guts, bones and glands: the make of a man.  
 Out of that labyrinth  
 The man emerges: becomes  
 What he is: by no grace  
 Can become other: can only seize  
 The pattern in the bone, in branching veins  
 In clever vesicles and valves  
 And imitate in acts that beauty. (ll. 125-134)<sup>17)</sup>

精神が静かに見上げる頭上に、透けて映し出される肉体のパターンが人間の本質であり、それが自然界に遍在する美と結び付くのは、精神によってではなく、肉体の動作によることを上の一節は述べているが、これは前章で検討した“Ode”の人間観と基本的には同じである。上の引用のあと、詩人は、“His nature is God's nature”（人の本質は神の本質である）とつづけるが、これは、人間を自然界の他の動植物と同一線上に置いた上で、むしろ人間の不幸は、この自然から限りなく遠のいていく精神活動にあることを詩人は引き続き述べている。精神はむしろ、冷えていく溶岩が作り出す水晶を、あるいは、一匹の甲虫の目に宿る自然の法則を模倣すべきなのである (ll. 119-121)。その時、自然全体のパターンが人間に感知され、この自然の枠組の中で、人間が神を知ることが可能となる。

But the pattern once perceiv'd and held  
 Is then viable; in good gait and going  
 In fine song and singular sign: in all  
 God's festival of perfect form. (ll. 141-144)<sup>18)</sup>

詩人は、五感で捉えることの出来る具体的な現象や動きが、ある完璧な姿を見せた時、そこに自然の本質が反映されることを確認しているものであり、この詩の場合、その本質に神の名を与えていたにすぎない。したがって、この神は、少なくとも、キリスト教の神とは異質であることは明らかであろう。

リードは、神にせよ自然の本質にせよ、形而上の問題を常に人間の延長線上で考える傾向があった。例えば、T. E. ヒュームは神と人間との連続性を断切ることこそ宗教的態度の根本であると主張し、この点をあいまいにしてきたルネッサンス以来のヒューマニズム思想を厳しく批判したのだが、その点では、リードは明らかにナイーブなヒューマニスト

- 17) (精神が、肉体の上に置かれた鏡をのぞくと、人間を構成する、はらわた、骨、腺が見えてくる。この迷宮から人間が現われ出る。人間は人間以外の何ものでもなく、何ものにもなれない。ただ、骨、分岐する血管、巧妙に作られた囊や弁でこのパターンを捉え、行為において、あの遍在する美を模倣するのみである。)
- 18) (ひとたび捉えれば、そのパターンは生きつづける。しっかりした足どりの中で、美しい歌やすばらしい表現の中で、そして完璧な形の神の祭りの中で。)

であった。しかしリードは、神と人間の不連続性の主張こそ不毛な仮説であって、それは人間の可能性を矮小化することであり、むしろ神を信じるということは、人間を信じることにあると考えていたのである。既にみてきたように、戦争という形で端的に現われる人間の愚行をまのあたりにして、リードは深い絶望に陥っていたのだが、しかし、自分を取り巻く自然の中には、ある完璧なパターンが存在するのを信じることは出来た。そして更に、同じ自然に連なるものとして人間の中にも同じパターンが反映していることを予感しながら、彼は人間の可能性に対する希望を堅持しようとしていたのである。このようなリードの自然観は汎神論と同根のものであると言えるが、しかしその自然観はあくまでも physical な場に踏み留まったもので、そこを一步も出るものではなかった。リード自身、自分を唯物論者だと言っているが、我々もそれを素直に受け取った方が良いだろう。彼は時として、この詩に見られるように、自然の姿の完璧なことに感動して「神」の名を口にするのであるが、見方によっては、彼が自分の宗教的立場として主張している不可知論は、神と自然の間を微妙に揺れ動く彼の心が生み出した、平衡感覚の産物だったかもしれない。

さて、“A World within a War” は、冬枯れの風景が死を暗示し、その死が詩人の置かれている状況とからみ合って殉教のイメージを生んだのだが、このイメージは神を暗示するものではなく、人間のなしうる崇高な行為を象徴するものであった。人間の理性を冒瀆し、野蛮な力が全てを支配する戦時下の状況と対峙しながら、詩人は、自分がいま住む土地にまつわる殉教者の例に勇気づけられて、自分の信仰を、すなわち、人間の理性とその可能性に対する信仰を、最後まで守りとうそうと決意していたのである。その時、従容として受け入れるべき死は、やはり、自然の懷に抱かれることであった。

The branches break. The beaters  
Are moving in: lie still my loves  
Like deer: let the lynx  
Glide through the dappled underwoods.  
Lie still: he cannot hear: he may not see.

Should the ravening death descend  
We will be calm: die like the mouse  
Terrified but tender. The claw  
Will meet no satisfaction in our sweet flesh  
And we shall have known peace  
In a house beneath a beechwood  
In an acre of wild land. (ll. 188-199)<sup>19)</sup>

19) (枝が折れる。勢子が入ってきた。さあ、鹿のようにじっとしていよう。まだらな下ばえに、大山猫をやり過ごそう。じっとしていよう。聞こえはしない。見えはしない。たとえ死が襲ってきても、じっとしていよう。怯えても穏やかなねずみのように死んでいこう。我々の肉に食い込む爪は失望するだけだろう。だが、我々は安らぎを知ることになろう。1 エーカーの荒野の中の、ぶなの林にあるこの家の中で。)

## 5

これまで、“Ode”と“A World within a War”を中心に、第二次世界大戦中のリードの内面世界の一部を辿ってきたわけだが、この時期のリードの最大の関心は、結局、“Ode”の一節にある、“Where can we turn for consolation?”という問に集約されるであろう。その意味では、彼は人間の悪をとことんまで見届けて、いわば、地獄を呈示するタイプの詩人ではなかった。少なくとも、体験的にはそうなる資格は十分あったと思われるが、彼は、結局、天国のヴィジョンを追い求める方を選んだのである。これは、「文学的」には、損な選択であったのは確かで、我々にとって、天国は地獄ほどのリアリティーを持たない。皮肉なことだが、リードの作品中、神話的とも言える程の深い意味と普遍性をもつ作品は、ユートピア世界の失敗を描いた *The Green Child* だけだったかもしれない。それはともかく、二度目の大戦はリードにとって精神的には地獄に等しいものであり、上に挙げた問に答えることは、彼にとっては絶体に必要だったのである。

天使にも悪魔にもなりうる人間性を問題にする時、もっぱら、その悪を抑え込むことによって秩序を得ようとする宗教や権威を求めるのではなく、善の可能性を実現できる自由な社会の建設を旨とすべきだというのが、リードの主張であり、たしかに、この主張は終生かわることはなかった。しかし、主張そのものは変らなかつたとは言え、第二次大戦後のリードの発言は慎重さを増し、以前の高らかな調子は影をひそめていくのである。そして、1953年には、矛盾に満ちた精神的遍歴の総仕上げでもするかのように、このアナキスト（だった詩人）は、女王の前に跪き、ナイトの称号を受けることになる。奥底には一貫した主張と理想を持ちながらも、表面的には幾つかの矛盾を露呈していたこの詩人の全体像を捉えようとするなら、さらに多角的な手法が必要とされるであろう。この小論は、いわば、第二次大戦中のある日の詩人のスナップをめざしたにすぎず、リードの思想的変遷は一応考慮外としたが、ともかく、第二次世界大戦が、このような変遷を生み出す一つの原因になっていたことは確かであろう。このことは、例えば、大戦直前の“A Song for the Spanish Anarchists”の持つ明るさと、大戦直後の“1945”に漂よう詩人の表情の暗さを見くらべても、ある程度は推測できるように思われる。黄金色のレモン畑で働くアナキストたちの瞳に、未来に向かって輝く光を見ていた詩人は、1945年には、浜辺で無邪気にたわむれ、詩人に向かって駆け寄ってくる子供たちの背後に、不吉な時代の前兆が黒々とした大波となって押し寄せてくるのを、じっと見つめているのである。図式的に言えば、この二つの詩の間に位置するのが、これまで検討してきた *A World within a War* であり、したがって、それは希望と絶望が絡み合って織りなす世界、あるいは、題名にこじつけて言えば、希望と絶望との戦いの世界だったのである。そして、“Where can we turn

for consolation?” という問に対して、希望に勝利を与えるべくリードが選んだ解答が、自然の美と力であった。この自然がリードにとってどのような意味を持つものだったかは、多少なりとも説明してきたのだが、このリードの解答を一言で言えば、神も信じられず、人間も信じられない時は、自然を信じれば良いということである。“Ode”における躍動する自然は、その明るさと生命力によって、リードに次代の人間へと希望をつなぐ勇気を与えたのであるが、このことは、戦後特に、彼が芸術による人間教育に大きな力を注ぐようになったことと無関係ではないだろう。また、“A World within a War”においては、いわば静止した自然の中に踏み込むことによって、そこに自然の本質に連なると思われる、ある大きなものの存在を予感し、彼の言う「栄光の感覚」を持つ生と表裏をなす、静かな死を受け入れる覚悟をするのであるが、これもその後のリードの方向を暗示するものであった。例えば、彼の最後の長篇詩 *Moon's Farm* が、死に場所を求めて故郷へ帰って行く詩人と擬人化された自然との対話となっているのは、リードの思想と生涯を象徴していたと言えるだろう。結局、リードにとって、自然を信じるということは、「神」を信じ、人間を信じることと直接結び付いていたのである。